

## 日常

山桜桃 佳正

「お前が女の子だったら付き合いたかったな。」

何気なく言われたその言葉。いま部室なのに。

「何言ってるんだよ馬鹿。」

「いやだってさ、明るいし、褒めるとき謙遜とかしないでありがとうっていうじゃん。なんか喋っていて楽しいんだよな。本とか薦めるときも本当にその本が好きっていうことが分かるぐらい楽しそうにしてるし。」

「意味わかんねえよ。それだったら友達でよくね。」

本当に友達でいたいという気持ちと恋人になりたいという気持ちはどの位違っているのだろうか。

「まあ、そうか。そういうえば課題やった？俺分からなくて見せて。」

ああ、さっきの話は流れた。

「前も見せたよな。今度ジューズおごれよ。ほら」

「ありがとう」

もし俺があいつの恋愛対象になるんだったらこんな会話ないんだろうな。どうせあいつが言った言葉に意味なんてない。そんな言葉に少しうれしくなって、でも絶対に変えられないことが条件に付いていて悲しくなる。まあ、たとえ俺が女であっても本当に言われるかなんてわからないけど。どうせ俺が男だったから、こんなに近づけて、こんなにあいつのことを知れたんだ。

「おーい、お前何考えてんの、アホ面みせてんぞ。」

「うるせえ、お前にどうやって課題のお礼をさせるか考えてんの。やっぱりジュースだけだと割に合わん。」

「うわ、どうせやること変わらないからいいじゃん。」

「見せてもらっている人という言葉かよ。信じられね。嘘でも、『ありがとう。何かお返しするよ』、くらい言えねえのかよ。」

「後期、お前の苦手な英語一緒にとつてやるから、その時課題見せる。これでどうだ。」

「それと夏休みどっかに食べに行くこと。支払いは割り勘でいいから。」

「それくらいなら楽勝だな。ていうか別に何もなくてもお前と一緒にご飯食べたいよ。」

「そうかよ。」

「それはそうと、もしかしたらさっきの俺が言った言葉に恥ずかしがっていたのかなって思っ  
話しかけたんよ。お前って顔に似合わず照れ屋さんだからな。まあ、俺のこと考えてたってこと  
は当たってたけど。いったこと全部本当だからな。」

「うるせえ、それ以上言うて課題取り上げるぞ。」

「はい、はいごめんなさい。今から黙って写しますよ。」

「お前、ちよつとは変えて書けよ。まるつきり同じだとばれる。」

「分かってるよ。」

あいつはそんなこと考えてないのに、俺ばかりあいつの言葉に反応する。だってあいつが本  
当に俺と付き合いたいか、俺のことが好きだったらこんな冗談みたいに言うはずない。俺もあ  
いつみたいに、冗談みたいに伝えられたらいいのに。ずっと隣にいて、一人でぐるぐる考えて辛  
くなる。冗談みたくても、あいつに伝わらなくても声に出したらきつと楽になる。ていうか伝え  
たくない。この関係がずっと続くならそれでいい。だけどこの心のとっかかりは外したい。なん  
かわがままだな。

こつこつと文字を紙に書く音がする。その音を聞きながら俺はまどろんだ。ずっとこのまま続  
けばいいのに。